

## 「姫路赤十字病院における わかりやすい誘導の事例」

Interior Coloring Plan for Medical Facilities  
An Example Way-finding on  
Himeji Red Cross Hospital



CD研究所  
第2研究部  
宮川理香  
Rika  
Miyagawa



CD研究所  
第2研究部  
佐古章子  
Akiko  
Sako

### Summary

As the elderly population is increasing in Japan, hospitals in general are progressing with further efforts for not only ensuring speedy recovery of patients but also for providing the patients with better environments as the healthy hospitals. In such situations we worked out and applied a coloring plan for Himeji Red Cross Hospital which was designed by Showa Sekkei, Inc. We report on its concept and the design we employed for the hospital.



写真1 姫路赤十字病院

### 要旨

高齢社会に突入し、病院建築においては患者の病気の回復を早めるだけでなく、人間性・居住性を重視した健院としての環境整備が進んでいる。そのような背景のもとに、姫路赤十字病院において設計を担当した(株)昭和設計と共同で病院の色彩計画に必要な手法を展開した。その、コンセプトおよび施工デザインについて報告する。

#### 1. はじめに

日本は世界一の長寿国として急速に高齢社会へ移行してきた。医療施設も疾病治療の場としての「病院」から、人々の健康を扱う「健院」として精神面に配慮した環境整備に注力しはじめている<sup>1)</sup>。具体的には“院内の目に付くところに観葉植物を配置する”、“待合室に絵を飾る”といった精神的な安定を助長するさまざまな工夫が進められている。そのなかで、居住性に大きな影響を与えるインテリアカラーの心理的効果も重視されてきているため、病院のインテリアデザインの評価研究や病院の色彩計画に必要な考え方の研究を進めてきた。実際に当社の色彩計画に基づきデザインをおこなった姫路赤十字病院を例にとり、病院のインテリアカラーに対する考え方及び具体的な施工デザインについて報告する。**写真1**は姫路赤十字病院の全景を示す。

#### 2. 姫路赤十字病院の概要

姫路赤十字病院は西播地区の基幹病院として明治41年に開設されて以来、地域に貢献し親しまれてきたが、度重なる増改築による施設構造の複雑化や建物の著しい老朽化のため、平成14年、新たに全面移転し新築された。内科・小児科をはじめ16科の診療科があり病床数は計503床、1日の想定外来数は1500名である。また、災害拠点とし

での役目も担っており、緊急輸送支援やライフライン支援、患者収容支援、救護活動支援などが行える準備がなされている<sup>2)</sup>。

所在地は兵庫県姫路市下手野である。姫路市は世界遺産である姫路城をシンボルとする観光都市であり、播磨臨海工業地帯を担う工業都市でもある。その市街地より西へ5km、東西を結ぶ幹線である国道2号線に面した自然環境に恵まれた環境に立地している。周辺は国道沿いに広がる一般的な商業地区の景観を有するが、大型施設がないため姫路赤十字病院がランドマーク的な位置づけとなっている。

### 3. 色彩計画コンセプト

姫路赤十字病院は赤十字精神の達成を目指した「地域安心拠点づくり」の目標のもと、基本理念として次の三つを設定している。

- ・患者に優しい病院づくり
- ・少子高齢化社会に対応する病院づくり
- ・地域に開かれた病院づくり

これらの基本理念をもとに色彩の効果をうまく活用するため、次のような色彩計画コンセプトを設定した。

テーマ：“Cool Head & Warm Heart 冷静さと優しさの象徴”

- ・明るく、親しみやすい病院
- ・分かりやすい病院
- ・高度先進医療への信頼を感じさせる病院<sup>3)</sup>

### 4. 内装の色彩計画

これまでの医療施設は医療従事者側の機能性を優先してつくられていたが、患者中心の医療を行うという目的から、患者の視点に立ち患者が満足する優しさを色彩で工夫する試みを行った。コンセプトにある「明るく、親しみやすい病院」「分かりやすい病院」の二つは特に内装色彩において表現することが重要である。

#### 4.1 「明るく、親しみやすい病院」

##### 4.1.1 メインロビーの基本的な考え方

メインロビーは、不安と緊張で病院の門をくぐる人々の緊張感をほぐし暖かく迎えることを目的として設計され、そこには“癒しの庭”と名付けられた水の流れる庭園がつけられた。写真2はメインロビーを、写真3は癒しの庭を示す。採用したインテリアカラーはこの庭園に調和するナチュラルカラーである。基調となる壁の色彩にやさしいトーンのオフホワイトを採用した。外来の受付と中央待合いホールには患者が長く滞留する場となるために、温もりを感じさせるテラコッタ系の暖かみのあるカラークリヤーを染色した木質仕上げとオフホワイト



写真2 メインロビー



写真3 癒しの庭



写真4 外来受付と中央待合いホール

のツートーンの壁を適用した。カーペットには自然の素材をイメージさせる色を採用した。写真4に外来の受付と中央待合いホールを示す。

##### 4.1.2 入院棟の基本的な考え方

高齢患者の場合、生活する環境が変化しただけでトランスファーショックを受けて痴呆が始まることもある。そこで、入院患者の入る部屋はできるだけ自宅でくつろぐのと同じ感覚でリラックスできることを目的とした。写真5には入院する



写真5 入院する部屋

部屋を示す。いかにも病院と感じさせる真っ白の壁や鉄パイプ製のベッドは避け、居室風の壁色、クリアー塗装の木製ロッカーはその色まで住居に近い色選定を行った。

#### 4.2 「分かりやすい病院」

大規模病院はひとつの施設に多種多様な機能を包括することになるため、複雑な構造になりがちである。病院という性格上、患者の短時間での移動が求められるが、ヒューマンスケールを超えた規模の空間を簡単に移動させることは容易ではない。そこで、この“分かりやすい誘導(ウェイファインディング)”を実現することを目的に、空間に存在する強弱(素材・天井高など)に色彩で変化を付けることによって動線における認識性を高くする、今までにない誘導システムを提案した。また、入院棟では同様に高齢患者の迷子回避策を検討した。

##### 4.2.1 診療部における分かりやすい誘導

診療部では診断に必要な「採血」「尿検査」「心電図」などの検査のために患者の検査室への移動が頻繁に行われる。しかし、病気を患っている人や高齢者にはその移動経路が分かりにくく、迷いやすいため負担になる場合が多い。古い施設でよく実施されている行き先ごとに色の異なるカラーテープを床に貼る誘導は効果があるが、カーペットタイルを採用した新施設はテープを貼ることができないため、廊下の辻にある門構えのような形状のゲートを活用した。検査の種類ごとに色を変えてゲートを設定した。移動する患者は通過するゲートの色を指示されて、目的地へ向かうシステムである。例えば、レントゲンコーナーへの移動には、まず、検査棟に行くための紫ゲート(写真6)を通る。そして、レントゲンコーナーの水色ゲート(写真7)を探す。水色ゲートにはレントゲンコーナーがあり、そこにあるすべてのサインはこの水色で統一した(写真8)。色別のゲートには色彩だけでなく文字も併記されており、空間性と色と文字により患者を的確に誘導できるのである。



写真6 検査棟入口ゲート



写真7 レントゲンコーナーの入口



写真8 レントゲンコーナー

##### 4.2.2 入院棟における分かりやすい誘導

入院棟は8フロアあり、さらに、エレベーターホールを中心に棟が東西に分かれている。通常、エレベーターホールは階数表示があるものの雰囲気似通っていることから、高齢者が増加するに従い目的地ではないフロアでエレベーターから降りるといったトラブルが頻繁に起きる。そこで、このようなトラブルを回避するため入院棟各フロアにフロアカラーを設定し、エレベーターホールの空間をフロア毎に異なる雰囲気にした。高齢者が誤ったフロアで降りようとしても無意識に



写真9 ナースステーション（東棟）



写真10 デイコーナーの壁と廊下の床（東棟）

エレベーターホールの雰囲気異なることに気づき降りるのを躊躇することを促したものである。

東西の棟も異なる雰囲気の空間をつくるため棟カラーを設定し、ナースステーションやデイコーナーの壁、廊下の床、ベッド周りのアクセントカラー、さらには吹き抜けの窓から見える配管に至るまで棟カラーで統一した。その結果を写真9、10に示す。

#### 4.3 「高度先進医療への信頼を感じさせる病院」

病院の軽快な三角病棟の形態は、ランドマークとしての役割だけでなく先進医療へ積極的に取り組む赤十字の姿勢を表現している。ともすると威圧感を与えてしまいそうな病棟形態には地域にとけ込む風土色を積極的に取り入れた。こうすることで地域環境との調和に配慮を行った。

##### 4.3.1 外装の基本的な考え方

外装に採用された風土色であるベージュは今も姫路城の一部に残る油壁をイメージしたものである。その形態を活かすため、外壁には多くの色を使用することを避けて、ベージュ(メタリック)を壁のサイディングから窓のサッシ、アルミルーバーに至るまで統一して使用した。メタリックのベージュ色を採用することで先進医療を表現している。

## 5. おわりに

医療福祉施設の色彩計画を行う場合、単に感性だけではなく論理的で、設計コンセプトに則っており、利用者に配慮したデザインを提供できるかに力を注ぐことが重要であると考える。特に高齢者の利用者が増えつつある現在、患者だけでなく子供から高齢者まで全ての人に配慮されたデザイン「ユニバーサルデザイン」が求められていると考えている。色彩計画に携わる私たちとしては「全ての人に優しい病院づくり」に色彩の面からさらなる貢献を図りたいと考えている。

なお、本物件は第4回グッドペインティングカラーの優秀賞を受賞した。“色彩あるいは色彩計画の持つ多様さ、可能性について一般の人にも十分理解してもらえる作品”との評価を頂いた。

最後に、内装には病院という性質上、院内感染対策に効果がある“院内感染対策用銀変性抗菌塗料システム”である「アレスシルバー工法」が採用されていることを申し述べておく。

## 6. 参考文献

- 1) 長沢 泰:第31回日本医療福祉設備学会予稿集(2002年)
- 2) 秋山克彦:近代建築1999年11月号「姫路赤十字病院」
- 3) 宮川理香:建築仕上技術2002年2月号、p46-48「姫路赤十字病院の色彩計画」